

母娘関係と「いい子」との関連

—母親の情緒的関わり, 母娘の絆と娘の安心感及び本来感に着目して—

寺 嶋 愛* ・ 吉 岡 和 子**

本研究では、娘が母親の情緒的関わりによって母娘の絆を築くことで安心感を得ることができたかどうかによって、娘の本来感や「いい子」を振る舞うかどうかが変化するのではないかと仮定し、娘の「いい子」の関連モデルを検討することを目的とした。女子大学生とその母親に対する質問紙調査を実施した結果、『母親の情緒的関わり』という「母親から認められる」経験が娘の「安心感」の獲得につながり、その「安心感」を基に「母娘の絆」を築いていき、「お母さんは自分の欲求を満たしてくれる、信頼できる存在なのだ」という母親に対する信頼感を得られる。それによって「本来感」が得られ「本当の自分」を表出することが可能となる。』という一連の過程が経験できれば、『娘は「我慢」して「いい子」を振る舞うことなく「自分らしく」いることができる』ということが示された。娘が「いい子」を振る舞うかどうかには「母親の情緒的関わりによる安心感の獲得」が非常に重要であり、娘が成長し、自立へと向かう過程においても継続して重要な意味を持ち続けると考えられる。

キーワード：「いい子」、情緒的関わり、母娘の絆、安心感、本来感

問題と目的

近年、「いい子（良い子・よい子）」という言葉をよく目にするようになった。岡田（2012）は、「良い子」について「相手の顔色を見て、気に入られようと振る舞ってしまう。自分の利益や生活を損なってまで、相手の都合に合わせて、尽くそうとすることもある。他人に気を遣いすぎるだけでなく、親にまで気をまわしすぎる。それも、幼い頃からの体験の中で、心に刷り込まれた行動パターンだ。」と述べている。また、淵上（1999）は「よい子」の行動と心理の特徴として「親の期待に応えようとしすぎる子」をテーマとし、「大人の尺度の世界に住む子どもたちは、大切な大人、いつも側にいる大人から愛され認められていると感じられないと不安になってしまうものである。何よりもまず、一番重要な存在である自分の親から自分へ向けられる感情に、子どもたちは心を研ぎ澄ましていくことにな

る。」と述べている。このように、「いい子」は常に親の様子に敏感になっているのである。

これまでの研究では「いい子」は「良い子」や「よい子」という表記がなされているが、本研究においては「いい子」という表記を採用する。三池（1999）は、自らの「よい子」の定義を「周囲の意見や雰囲気を感じ取り協調し、自己抑制して自らを出さずに生きている子どもたち」とし、「子どもたちは、自分を抑制することを学び、自分の本当の姿を学ばない。」と述べている。「いい子」とは「親の愛情や承認を求めるが故に、親の期待、願い、雰囲気を敏感に感じ取り、必死で本当の自分の姿を抑制し「いい子」を振る舞っている子ども」であると言えよう。そこで、本研究では、「いい子」を『親からの愛情を得るために「いい子」として振る舞う子ども』と定義する。

「いい子」として振る舞うということは、親からの愛情を求めるが故に、親の期待、願い、雰囲気を敏感に感じ取り、必死で本当の自分の姿を抑制しているということである。例えば、幼児期の子どもがおもちゃを買ってほしいがために泣きわめくなど、自らの欲求

*飯塚記念病院 臨床心理士

**福岡県立大学大学院 人間社会学研究科 心理臨床専攻 准教授

を満たすよう親に要求するというのは子どもの健康な姿であろう。しかし、「いい子」はそれができない。自分が親から愛されるためには、自分の欲求を表出していけないのである。つまり、本当の自分の気持ちを自由に表現できるというような「本当の自分の姿」ではいられないということになる。本研究では、この「本当の自分の姿」を「本来感（伊藤・小玉，2005）」と定義する。伊藤・小玉は、「本来感」を「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と操作的に定義している。つまり、子どもが「いい子」を振る舞うということは、「本来感の喪失＝自分らしさの喪失」が生じている状態であると言えよう。具体的には、親の期待や願いを汲みとり、親の言う通りにする、親の顔を窺って言動を起こすなどであり、子どもにとっては「本当の自分ではなく、自分ではない自分」ことで、これが「いい子を振る舞う」状態であると考えられる。

ここまで「いい子」について述べてきたが、多くの事例を通して「いい子」とは親子関係の中で、特に母親との関係に問題を抱えている場合に多く出現している。子どもにとって母親は自分に愛情や承認を与えてくれる重要な存在であり、子どもは母親から愛されたいという欲求を満たそうと、母親の顔をうかがい、母親に認められ、褒められ、喜ばれるように「いい子」を振る舞う。この繰り返しによって、「いい子」としての振る舞いのパターンが刷り込まれ、いつしかそれが当たり前ものとなっていく。そこで、本研究では、「いい子」と母親との関係について検討する。

本研究において、母親の関わりと「いい子」との関連を検討していくにあたって着目したのが Bowlby（1969, 1973）の愛着理論である。愛着とは、子どもと養育者との間に形成される緊密な情緒的絆を指す。子どもが母親と愛着を形成していく中で重要なのが「母親の情緒的関わり」である。乳児が生得的に備えた初期の対人行動である注視、微笑、喃語などによって母親を近づけ、それに対して母親が接近し、世話をし、微笑みかけ、声をかけるというやりとりが愛着形成には欠かせない。離乳食を食べた時に「おいしいねー」、心地よいそよ風に「気持ちいいねー」などと子どもの体験に言葉を重ねることで、子どもは体の中で生じている感覚を確認し、それが共に感じ合える感覚であることを知っていく。こうしたやり取りを通して乳幼児は情緒と言葉、人とつながり合う力を育てていく（増沢 2012）。このように、母親が子どもの世話をしたり、微笑みかけたり、声をかけたり、子どもの要求

に応答することや、子どもの体験に寄り添いながら共に感じ合うことなど、母親の情緒的関わりは愛着形成において非常に重要なものである。そして、母親の子どもへの情緒的な関わりによって母子の愛着が形成されていくことによって、子どもは母親への安心感を得ながら成長していくことができる。そこで、本研究では、母親の情緒的関わりに着目していく。なお、本研究では、母子の愛着形成において必要な母親の応答性、受容性、反応性といった「あたたかく肯定的な母親の関わり」を「母親の情緒的関わり」とする。

子どもが乳幼児期に母親と愛着を形成していくときに感じた安心感は、母子の絆にとっても重要なものであり、母親は自分に情緒的関わりを与え続けてくれるという安心感があるからこそ、母子の絆を結ぶことができるのではないだろうか。そのため、本研究では母子の絆を安心感の一部とし、母親の情緒的関わりと母子の絆との関連を検討していく。

子どもが母子の絆を形成していく中で必要とする母親の情緒的関わりは、子どもの成長とともに変化していくものと思われる。乳幼児期には、母親が子どもの不安や恐怖を受け止め、あやし、諭すなどの年齢にあった対応が子どもを安心へと導いていく（増沢，2012）。その後、幼児期から児童期になってくるにつれて、子どもは母親と言語によるコミュニケーションを行うようになり、自分の要求を言葉で伝えることができるようになる。この時期の子どもは外の世界で様々な体験をしていくことになる。その中で起こったうれしい体験、楽しい体験、つらい体験などを母親のもとに帰ってきたときに話したり、尋ねたりするようになる。それを母親が聞いてくれるかどうか、どのような反応をしてくれるか、ということが子どもの母親への安心感となると考える。そして、思春期、青年期は、心理的離乳、第2の分離個体化、アイデンティティの確立などの過程にあり、親からの心理的自立に葛藤を生じやすい。しかし、思春期、青年期特有の課題に向かっていくためにも子どもは母親の心理的なサポートを求めていると考える。岩宮（2009）は、子どもが人に気持ちを伝えることができるようになるためには、身近に優れた聞き手がいる必要があると述べている。子どもが乳幼児期から安心感を得ながら愛着を形成してきた母親が最も身近な聞き手となり得るのではないだろうか。母親が自分の悩みを聞いてくれる存在かどうか、自分の存在や自分の考えを認めてくれる存在であるかどうか、アドバイスを与えてくれる存在であるかどうかによって、子どもは安心感を得ることができ、

この時期の課題に向かっていくことができると考える。このように、年齢にあった対応が子どもを安心へと導いていくと考えられ、各発達段階における子どもの母親への欲求に対して、母親がどう応答しているかということが、母子の絆の形成につながると考えられる。本研究では、母親の情緒的関わりを「あたたかく肯定的な母親の関わり」と定義したが、特に「子どもの欲求や要求に対する母親の応答性」を重視し、子どもの発達段階に沿って「スキンシップ」「コミュニケーション」「心理的サポート」の3つの観点から捉えることとする。その際、「スキンシップ」を抱っこ、頭をなでるなどの「母子の身体的な接触やふれあい」、「コミュニケーション」を母親は自分の話すことを何でも聞いてくれる、出かける時に見送ってくれるといった「母親の応答性・見守り」、「心理的サポート」を自分の言うことを認めてくれる、悩みがある時にアドバイスをくれるといった「母親の承認・助言」と定義する。

以上のような母親の情緒的関わりによって、子どもは安心感を得ることができ、母子の絆を形成しながら成長していくと考えられ、安心感を得られてきたかどうかということが、子どもが「いい子」を振る舞うことに影響を与えるのではないかと考える。これまで安心感という言葉を繰り返し用いてきたが、ここで本研究における安心感について述べておく。

本研究における安心感は、母子が愛着を形成する際に子どもが感じる安心感や基本的信頼感が基礎にあるものであり、「お母さんといるとホッとする」「お母さんは信頼できる存在である」といった感覚である。これは、則定（2008）の「心理的居場所感」の概念と共通する。則定は、心理的居場所感を「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場があるという感情」としている。これまでの研究において、心理的居場所感と特に深く結びついている感覚として、安心感の存在が挙げられてきた（岡村，2004；白井，1998；秦，2000；宮下・石川，2005；田島，2000；田中・田嶋，2004）。これは、落ち着く、ホッとする、安心するという主観的認知が心理的居場所感を構成する1つの感覚であることを示唆している（則定，2008）。また、大河原（2006）によると、安心感は、不快を親から承認されることによって喚起されるものであり、安心感の獲得のためには、子どもが自らの身体の不快をちゃんと表出することがその前提として求められる。しかし、自らの不快を自己制御できる「よい子」であれば愛されるが、「ぐずぐず（不快）」を表出する子であれば愛されないという環境にお

いては、安心感は育たないのである（大河原，2012）。つまり、「子どもがしっかりと自らの要求を母親に表出できるかどうか」ということが子どもの安心感の獲得には重要であると言える。しかし、親が子どもの要求に対して応答しないような場合、子どもは親からの応答を期待できないことを理解し、安心感を得られない。その結果、子どもは親の期待や願いを汲みとって自らの要求を抑制し、「いい子」を振る舞うと考えられる。つまり、安心感と「いい子」には関連があると言えるだろう。そこで、本研究では、子どもの安心感と「いい子」との関連についても検討する。

近年では「一卵性双生児現象」とも言われるほど母と娘の親密性は増してきているとされる（柏木・永久，1999）。一方で、母娘関係は自立・分離と依存・親密が同居する複雑な関係であり、近いがゆえに葛藤が未解決なままになりやすいという一面もある（水本，2009）。このように、母親と娘の関係は特殊なものであり、娘が乳幼児期から形成してきた母親との絆を深めながら成長していく過程において、母親の存在は重要な意味を持ち続けるものであると考えられる。また、娘の精神的自立の過程には娘と母親の複雑な関係があるという点から、乳幼児期から母親と愛着や絆を築いてきたかどうか、母親の応答性が期待できる存在であったかどうか、安心感や本来感を得られたかどうか、「いい子」を振る舞ってきたかどうかということが、娘の場合には特に重要な意味をもつと考えられる。そのため、本研究では母娘関係に焦点を当てることとし、青年期にあたる女子大学生を対象とする。

本研究の目的と仮説

これまで「いい子」について取り上げられている研究は、事例の面接過程を追っているものが多く、母子関係との関連を直接的に検討しているものは少ない。そこで、本研究では、母親の情緒的関わり、母娘の絆、安心感、本来感、「いい子」をそれぞれ尺度化し、より普遍的に母親の関わりと「いい子」との関連を検討する。

具体的には、下記の2つの仮説を基に、研究Iでは、母親の情緒的関わり、母娘の絆、安心感、本来感、「いい子」の関連について、Fig. 1に示すようなモデル（以下、娘の「いい子」の関連モデル）を検討することを目的とする。娘が母親の情緒的関わりによって母娘の絆を築くことで安心感を得ることができたかどうかによって、娘の本来感や「いい子」を振る舞うかどうかに変化するのではないかと仮定する。

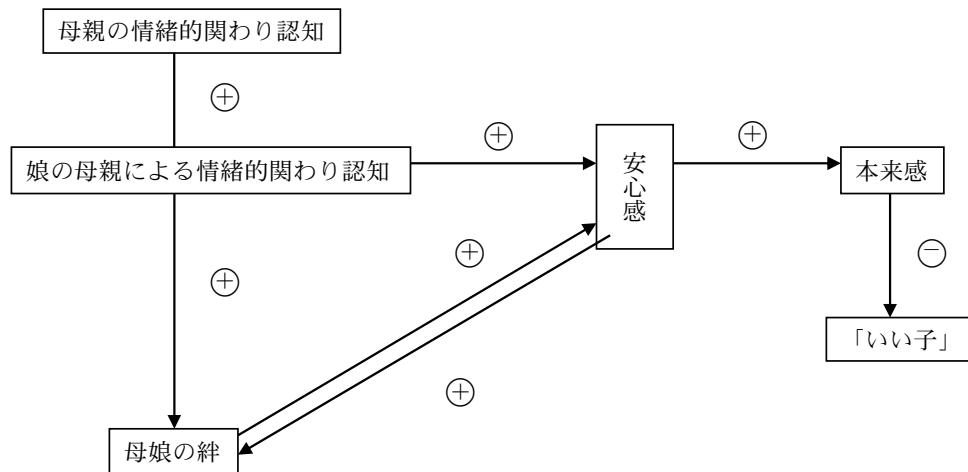


Fig. 1 母親の関わりと娘の「いい子」の関連モデル

仮説1：娘が母親の情緒的関わりを経験することによって母娘の絆が形成されていき、それによって娘は安心感や本来感を得ることができる。そうすることで娘は「いい子」を振る舞わずに自分らしくいられる。

仮説2：娘が母親の情緒的関わりを経験できなければ母娘の絆は形成されず、娘は安心感、本来感を得ることができない。よって娘は「いい子」を振る舞う。

方 法

1. 調査時期および調査対象

2014年7月から10月にかけて、福岡県立大学の女子学生（2～4年生）140名に質問紙調査を実施した。また、調査対象である学生の母親にも質問紙調査を行うため、質問紙を学生から手渡してもらい、母親が記入後、学生から回収ボックスに提出してもらった。

2. 調査内容

1) フェイスシート

娘には、学年、母親の有無について尋ねた。母親には、娘の学年を尋ねた。また、母娘のデータをセットで利用するため、娘と母親の誕生日をパスワードとして記入してもらった。

2) 母親の情緒的関わりについて

三砂・竹原・嶋根・野村（2006）の母娘関係尺度、新美・永田・松尾（2006）の母娘の相互支援の尺度のうち心理的サポートの項目、小林・加藤（2007）の情緒的甘え尺度を参考に、母親の情緒的関わり尺度を作成した。母親の情緒的関わり尺度は、「スキンシップ」11項目、「コミュニケーション」9項目、「心理的サポ

ート」13項目の3つの下位尺度から成る。母親の質問紙では、すべて「私は子どもと…」という形に変えて用いた。

「スキンシップ」については、娘に対しては、はじめに「あなたの幼稚園・保育園・小学校の時を思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、当時の母親の関わりを思い出しながら回答してもらった。項目1は「お母さんとスキンシップをしていた」という頻度を問う項目であり、「全くなかった（1点）」から「よくあった（4点）」の4件法で回答してもらった。その他の項目は「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（6点）」の6件法で回答してもらった。

母親に対しては、はじめに「あなたのお子さんの幼稚園・保育園・小学校の時を思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、当時の自分の娘への関わりを思い出しながら回答してもらった。娘と同様に、項目1のみ4件法で回答してもらい、その他の項目は6件法で回答してもらった。

「コミュニケーション」については、娘に対しては、はじめに「あなたの小学生の時から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、当時の母親の関わりを思い出しながら回答してもらった。項目1は「お母さんと話をする時間があつた」という頻度を問う項目であり、「全くなかった（1点）」から「よくあった（4点）」の4件法で回答してもらった。その他の項目は「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（6点）」の6件法で回答してもらった。

母親に対しては、はじめに「あなたのお子さんの小

母娘関係と「いい子」との関連

学生の中から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、当時の自分の娘への関わりを思い出しながら回答してもらった。娘と同様に、項目1のみ4件法で回答してもらい、その他の項目は6件法で回答してもらった。

「心理的サポート」については、娘に対しては、はじめに「あなたの小学生の時から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、当時の母親の関わりを思い出しながら回答してもらった。項目1は「お母さんは私のサポートをしてくれた」という頻度を問う項目であり、「全くなかった(1点)」から「よくあった(4点)」の4件法で回答してもらった。その他の項目は「全くそう思わない(1点)」から「とてもそう思う(6点)」の6件法で回答してもらった。

母親に対しては、はじめに「あなたのお子さんの小学生の時から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、当時の自分の娘への関わりを思い出しながら回答してもらった。娘と同様に、項目1のみ4件法で回答してもらい、その他の項目は6件法で回答してもらった。

3) 母娘の絆について

新美・永田・松尾(2006)の母と娘の絆尺度23項目のうち22項目を用いた。新美らの尺度では「お母さんは生き方の1つのモデルを私に示してくれたと思う」という項目が含まれていたが、本研究で意図する「母娘の絆」は、より日常場面において感じられるものであり、この項目はそれより大きな枠組みで捉えたものであると考え、それを除く22項目を用いた。娘に対しては、はじめに「現在のあなたとあなたのお母さんとの関係についてお尋ねします。」と教示し、それぞれの項目について、現在の母親との関係を考えながら「全くあてはまらない(1点)」から「非常によくあてはまる(5点)」の5件法で回答してもらった。母親に対しては、はじめに「現在のあなたのお子さんとの関係についてお尋ねします。」と教示し、娘がどう思っているかを想像してもらいながら5件法で回答してもらった。

4) 母親への安心感について

則定(2008)の青年版心理的居場所感尺度を参考に、母親への安心感尺度11項目を作成した。娘に対しては、「あなたの幼稚園・保育園の時から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの

項目について、母親との関係を考えながら「全くそう思わない(1点)」から「とてもそう思う(6点)」の6件法で回答してもらった。母親に対しては、「あなたのお子さんの幼稚園・保育園の時から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、娘が自分との関係についてどう思っているかを想像してもらいながら6件法で回答してもらった。

5) 娘の本来感について

伊藤・小玉(2005)の本来感尺度7項目を「お母さんという時」と限定した文章に変えて用いた。娘に対しては、はじめに「あなたの幼稚園・保育園から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、母親との関係を考えながら「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」の5件法で回答してもらった。母親に対しては、はじめに「あなたのお子さんの幼稚園・保育園の時から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、それぞれの項目について、娘が自分との関係についてどう思っているかを想像してもらいながら5件法で回答してもらった。

6) 「いい子」について

岡田(2012)を参考に、「いい子」尺度17項目を作成した。そのうち、回答に対する抵抗を考慮して意図的に項目とした「5. 私はお母さんに相談するのが好きだった」「12. 私は悲しい時にお母さんと話をしていた」「17. 私はお母さんに気持ちをわかってもらっていた」という3項目は分析には用いないこととした。

娘に対しては、はじめに「幼稚園・保育園の時から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、母親との関係を考えながら、項目1については「はい」「いいえ」の2件法で、その他の項目については「全くそう思わない(1点)」から「とてもそう思う(5点)」の5件法で回答してもらった。母親に対しては、「あなたのお子さんの幼稚園・保育園の時から現在までを思い浮かべて下さい。」と教示し、娘がどうだったかを考えながら、項目1については2件法で、その他の項目については5件法で回答してもらった。

結 果

1. 因子分析結果

1) 母親の情緒的関わり尺度の因子構造

母親の情緒的関わりを「スキンシップ」11項目、「コミュニケーション」9項目、「心理的サポート」13項目の3つに分け、それぞれについて因子分析を行った。

なお、それぞれの1項目目は頻度を問うものであるため、「スキンシップ」10項目、「コミュニケーション」8項目、「心理的サポート」12項目について因子分析を実施した。

(1) 「スキンシップ」の因子構造

母親の情緒的関わり尺度の「スキンシップ」10項目について因子分析を行い、主因子法による1因子構造を採用した。信頼性係数は $\alpha = .934$ であり、十分な信頼性が得られたと言える。その因子負荷量と共通性をTable. 1に示す。

(2) 「コミュニケーション」の因子構造

母親の情緒的関わり尺度の「コミュニケーション」8項目について因子分析を行い、主因子法による1因子構造を採用した。信頼性係数は $\alpha = .900$ であり、十分な信頼性が得られたと言える。その因子負荷量と共通性をTable. 2に示す。

(3) 「心理的サポート」の因子構造と信頼性の検討

母親の情緒的関わり尺度の「心理的サポート」12項目について因子分析を行ったところ、2因子構造が適当と判断した。因子負荷量から1項目「12. お母さんは「きっと大丈夫だよ」など私を安心させる言葉をかけてくれた」を除外し、再度因子分析を行い、主因子法（プロマックス回転）による2因子11項目（因子負荷量.500以上）を採用した。その因子負荷量、共通性、因子間相関をTable. 3に示す。

第1因子は、「8. お母さんは私の考えに賛成してくれた」「7. お母さんは私の言うことやすることを認めてくれた」などの7項目であり、母親が娘の言動を認める行動をとっていると考えられるため、「承認」と命名した。第2因子は、「2. お母さんは私の悩みを聞いてくれた」「5. お母さんは私が困った時やつらい時に一緒に悩んだり考えたりしてくれた」などの4項目であり、母親が娘を助ける行動をとっていると考えられるため、「援助」と命名した。

Table. 1 情緒的関わり尺度「スキンシップ」因子分析結果

($\alpha = .934$)		共通性
5. お母さんは私の頭をなでてくれた。	.824	.679
11. お母さんは私とくすぐりあったりじゃれあったりしてくれた。	.805	.648
10. お母さんは私を膝の上に座らせてくれた。	.802	.643
4. お母さんは私とハイタッチしてくれた。	.798	.637
7. お母さんは私を抱きしめてくれた。	.790	.625
3. お母さんは私と手をつないでくれた。	.781	.610
2. お母さんは私を抱っこしてくれた。	.779	.607
6. お母さんは私とおでこをくっつけてくれた。	.777	.604
9. お母さんは私を寝かしつけてくれた。	.668	.473
8. お母さんは私の隣で寝てくれた。	.621	.386

因子抽出法：主因子法

Table. 2 情緒的関わり尺度「コミュニケーション」因子分析結果

($\alpha = .900$)		共通性
3. お母さんは私が話しかけやすい雰囲気があった。	.816	.666
2. お母さんは私が話しかけると返事をしてくれた。	.813	.660
8. お母さんは私の話すことは何でも聞いてくれた。	.812	.659
4. お母さんは私といる時笑顔だった。	.804	.647
6. お母さんは私に「いってらっしゃい」や「おかえり」を言ってくれた。	.783	.613
5. お母さんは私に「おはよう」や「おやすみ」を言ってくれた。	.765	.585
7. お母さんは私が出かける時私を見送ってくれた。	.747	.559
9. お母さんは私とお母さんにしかわからない特別な言葉やコミュニケーション方法を使ってくれた。	.503	.253

因子抽出法：主因子法

母娘関係と「いい子」との関連

Table. 3 情緒的関わり尺度「心理的サポート」因子分析結果

第1因子：承認 ($\alpha = .945$)	1	2	共通性
8. お母さんは私の考えに賛成してくれた。	1.004	-.153	.811
7. お母さんは私の言うことやすることを認めてくれた。	.960	-.110	.783
6. お母さんは私をほめてくれた。	.779	.047	.662
11. お母さんは私を応援してくれた。	.700	.193	.720
9. お母さんは私がうれしい時に一緒に喜んでくれた。	.675	.255	.767
13. お母さんは私の気持ちを大切にしてくれた。	.640	.229	.673
10. お母さんは私が何か決める時に後押しをしてくれた。	.581	.322	.711
第2因子：援助 ($\alpha = .955$)			
2. お母さんは私の悩みを聞いてくれた。	-.060	1.010	.878
5. お母さんは私が困った時やつらい時に一緒に悩んだり考えたりしてくれた。	.033	.927	.904
3. お母さんは私が悩みがある時にアドバイスをくれた。	.034	.869	.799
4. お母さんは私が困った時やつらい時に一緒にいてくれた。	.094	.833	.814
【尺度からはずれた項目】	因子間相関	1	2
12. お母さんは「きっと大丈夫だよ」など私を安心させる言葉をかけてくれた。	1	.717	
	2	.717	

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

また、尺度および各因子の内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を用いた。尺度全体の α 係数は.957であり、それぞれの因子においては、「承認」因子が $\alpha = .945$ 、「援助」因子が $\alpha = .955$ であった。よって、尺度を構成する質問項目が内的整合性をもつことが認められた。

2) 母娘の絆尺度の因子構造と信頼性の検討

新美・永田・松尾(2006)の母と娘の絆尺度23項目のうち22項目を母娘の絆尺度とし、因子分析を行った。因子負荷量から5項目「8. お母さんに大事に思われていると感じる」「14. お母さんに突き放されるとショックである」「18. お母さんの考え方や生き方を尊重している」「19. 重要なことを決めるときには相談する」「22. 私の価値観はお母さんの価値観と一致している」を除外し、再度因子分析を行い、主因子法(プロマックス回転)による3因子17項目(因子負荷量.500以上)を採用した。その因子負荷量、共通性、因子間相関をTable. 4に示す。

第1因子は、「2. お母さんを大事に思っている」「1. お母さんに対して感謝の気持ちを持っている」などの7項目であり、娘が母親に対する感謝や愛情を感じていると考えられるため、「感謝・愛情」と命名した。第2因子は、「9. お母さんは私のことを誇りに思っている」「10. 私とお母さんはお互いに信頼し合っていると思う」などの5項目であり、娘が母親との間に

信頼感を得られていると考えられるため、「信頼関係」と命名した。

第3因子は、「12. お母さんによって自分の視野が広がった」「6. お母さんによって自分の人生観が深められた」などの5項目であり、娘が母親を自分のモデルと捉えていると考えられるため、「人生のモデル」と命名した。

尺度および各因子の内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を用いた。尺度全体の α 係数は.948であり、それぞれの因子においては、「感謝・愛情」因子が $\alpha = .937$ 、「信頼関係」因子が $\alpha = .880$ 、「人生のモデル」因子が $\alpha = .861$ であった。よって、尺度を構成する質問項目が内的整合性をもつことが認められた。

3) 母親への安心感尺度の因子構造と信頼性の検討

母親への安心感尺度11項目について因子分析を行い、主因子法による1因子構造を採用した。信頼性係数は $\alpha = .953$ であり、十分な信頼性が得られたと言える。その因子負荷量、共通性、因子間相関をTable. 5に示す。

4) 「いい子」尺度の因子構造と信頼性の検討

「いい子」尺度13項目について因子分析を行った。因子負荷量から1項目「2. 私はお母さんの言うとおりにしていた」を除外し、再度因子分析を行い、主因子法(プロマックス回転)による2因子12項目(因子負荷量.500以上)を採用した。その因子負荷量、共通性、因子間相関をTable. 6に示す。

Table. 4 母娘の絆尺度 因子分析結果

第1因子：感謝・愛情 ($\alpha = .937$)	1	2	3	共通性
2. お母さんを大事に思っている。	.971	.027	-.118	.839
1. お母さんに対して感謝の気持ちを持っている。	.936	-.002	-.072	.791
7. お母さんに対してこれからは親孝行したい。	.802	.119	-.101	.677
16. 私はお母さんの子であってよかったと思う。	.768	.192	-.035	.785
3. お母さんを尊敬している。	.744	-.153	.281	.718
13. 最近お母さんのありがたみを感じるがよくある。	.713	-.108	.249	.675
17. お母さんと一緒にいるだけでなんとなく安心できる。	.590	.371	-.072	.699
第2因子：信頼関係 ($\alpha = .880$)				
9. お母さんは私のことを誇りに思ってくれている。	.108	.778	-.040	.686
10. 私とお母さんはお互いに信頼し合っていると思う。	.233	.685	-.001	.738
11. 私とお母さんはお互いに自分の考えや意見をはっきり言い合える。	.010	.681	.106	.580
15. 私とお母さんはお互いに悩みを打ち明けられる。	-.090	.666	.220	.586
20. 私とお母さんは対等な関係であると思う。	-.018	.644	.115	.507
第3因子：人生のモデル ($\alpha = .861$)				
12. お母さんによって自分の視野が広がった。	-.025	.153	.735	.684
6. お母さんによって自分の人生観が深められた。	.168	.001	.708	.685
5. 私とお母さんはお互いに独立した人間として付き合っている。	-.136	.128	.567	.328
21. お母さんの影響で自分の考えがしっかりしたものになった。	-.053	.419	.511	.654
4. 何かを決める際、お母さんの意見は十分参考になる。	.467	-.090	.504	.670
【尺度からはずれた項目】	因子間相関	1	2	3
8. お母さんに大事に思われていると感じる。	1		.678	.653
14. お母さんに突き放されるとショックである。	2	.678		.656
18. お母さんの考え方や生き方を尊重している。	3	.653	.656	
19. 重要なことを決めるときには相談する。				
22. 私の価値観はお母さんの価値観と一致している。				

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

Table. 5 母親への安心感尺度 因子分析結果

($\alpha = .953$)	1	共通性
4. お母さんといるとほっとする。	.908	.824
8. お母さんといると落ち着く。	.891	.794
6. お母さんといると居心地がいい。	.887	.787
10. お母さんは私のことをわかってくれる。	.883	.780
1. お母さんといると安心する。	.871	.758
9. お母さんは私のことを大切にしてくれる。	.866	.750
2. お母さんは私を無条件に愛してくれる。	.865	.749
7. お母さんはどんな私も受け入れてくれる。	.812	.660
3. お母さんの気分や私への態度はいつも安定している。	.719	.517
5. お母さんは私に全部任せてくれる。	.662	.438
11. お母さんには言いたいことが言える。	.654	.428

因子抽出法：主因子法

母娘関係と「いい子」との関連

Table. 6 「いい子」尺度因子分析結果

第1因子：我慢 ($\alpha = .894$)	1	2	共通性
3. 私はお母さんに自己主張できなかった。	.853	-.075	.673
11. 私はお母さんの前では自分を素直に出せなかった。	.831	-.185	.579
6. 私はお母さんの前ではがまんしていた。	.781	.103	.697
7. 私はお母さんの顔色を窺っていた。	.771	.153	.730
10. 私はお母さんに甘えたくても甘えられなかった。	.715	-.129	.440
4. 私はお母さんに反抗できなかった。	.679	.035	.485
13. 私は自分の都合よりお母さんの都合を優先させていた。	.574	.112	.403
第2因子：従順 ($\alpha = .891$)			
16. 私はお母さんの評価がほしかった。	-.132	.939	.781
15. 私はお母さんに認めてほしかった。	-.079	.836	.642
8. 私はお母さんにいい子だと思われたかった。	-.023	.792	.610
14. 私はお母さんに喜んでもらおうとふるまっていた。	.023	.738	.560
9. 私はお母さんの反応を気にしていた。	.356	.586	.668
【尺度構成からはずれた項目】	因子間相関	1	2
2. 私はお母さんの言うとおりにしていた。	1		.489
5. 私はお母さんに相談するのが好きだった。	2	.489	
12. 私は悲しい時にお母さんと話をしていた。			
17. 私はお母さんに気持ちをわかってもらっていた。			

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

第1因子は、「3. 私はお母さんに自己主張できなかった」「11. 私はお母さんの前では自分を素直に出せなかった」などの7項目であり、娘が母親に対して主張したり、自分らしくいることを我慢していると考えられるため、「我慢」と命名した。第2因子は、「16. 私はお母さんの評価がほしかった」「14. 私はお母さんに喜んでもらおうとふるまっていた」などの5項目であり、娘が母親の評価や承認を得るために母親に従うようなふるまいをしていると考えられるため、「従順」と命名した。

尺度および各因子の内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を用いた。尺度全体の α 係数は.899であり、それぞれの因子においては、「我慢」因子が $\alpha = .894$ 、「従順」因子が $\alpha = .891$ であった。よって、尺度を構成する質問項目が内的整合性をもつことが認められた。

2. 娘の「いい子」の関連モデルの検討

Fig. 1で示した仮説モデルに基づいて共分散構造分析を行った。以下、モデルの実線の矢印は正の関連、破線の矢印は負の関連を示す。

直接効果が得られたのは、「安心感」→「本来感」(.579)、「本来感」→「いい子」(-.361)、「母娘の絆」

→「安心感」(1.072)であった。

モデルの適合度指標は、GFI=.904、AGFI=.755、CFI=.947、情報量基準はAIC=84.663であり、モデルによるデータの説明率にはやや問題があると判断した。そのため、有意でないパスを削除し、再度分析を行い、よりデータの説明率の高いモデルを検討することとした。モデルを修正しながら、適合度指標を基準に分析を行い、最も良い適合度が得られ、データの説明率には問題がないと判断したFig. 2に示すモデルを採用した。適合度指標は、GFI=.946、AGFI=.864、CFI=.974、情報量基準はAIC=37.366であった。

直接効果が得られたのは、「心理的サポート」→「安心感」(.866)、「安心感」→「母娘の絆」(.878)、「母娘の絆」→「本来感」(.663)、「本来感」→「いい子」(-.361)であった。

3. 因子ごとの娘の「いい子」の関連モデルの検討

最終モデルを参考に、「心理的サポート」を「承認」「援助」の2因子、「母娘の絆」を「感謝・愛情」「信頼関係」「人生のモデル」の3因子、「いい子」を「我慢」「従順」の2因子とし、1因子構造であった「スキンシップ」「コミュニケーション」「安心感」「本来感」を含めた11因子を分析に用いてモデルを検討した。

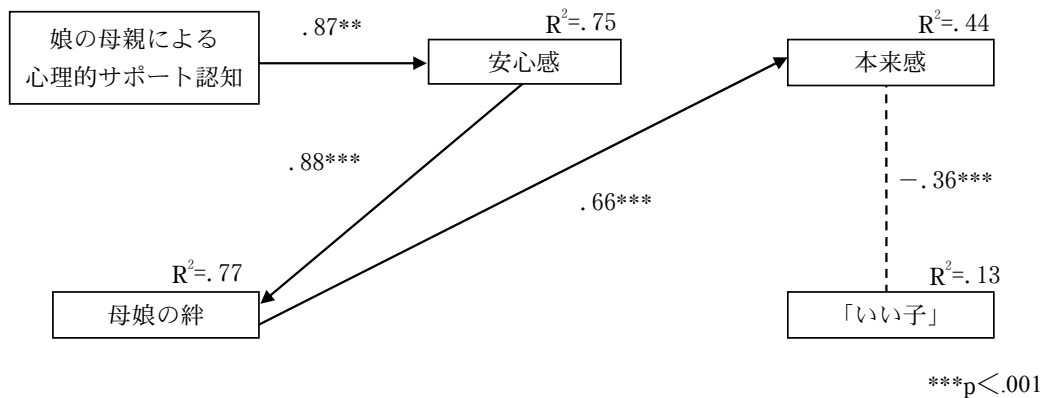


Fig. 2 最終モデル

直接効果が得られたのは、「援助」→「安心感」(.311), 「承認」→「安心感」(.669), 「安心感」→「本来感」(.580), 「本来感」→「我慢」(-.457), 「安心感」→「感謝・愛情」(.816), 「安心感」→「信頼関係」(.835), 「安心感」→「人生のモデル」(.783)であった。モデル適合度指標は, GFI=.822, AGFI=.674, CFI=.896, 情報量基準はAIC=215.499であり, モデルによるデータの説明率にはやや問題があると判断した。そのため, 有意でないパスを削除し, 再度分析を行い, よりデータの説明率の高いモデルを検討することとした。

モデルを修正しながら, 適合度指標を基準に分析を行い, 最も良い適合度が得られ, データの説明率には問題がないと判断したFig 3に示すモデルを採用した。適合度指標は, GFI=.864, AGFI=.755, CFI=.923, 情報量基準はAIC=119.354であった。

直接効果が得られたのは、「援助」→「安心感」(.259), 「承認」→「安心感」(.660), 「安心感」→「信頼関係」(.810), 「信頼関係」→「本来感」(.626), 「本来感」→「我慢」(-.457), 「安心感」→「感謝・愛情」(.805), 「安心感」→「人生のモデル」(.739)であった。

考 察

1. 娘の「いい子」のモデルについて

①娘が母親の情緒的関わりを経験することによって母娘の絆が形成されていき, それによって娘は安心感, 本来感を得ることができ「いい子」を振る舞わずに自分らしくいられる。②娘が母親の情緒的関わりを経験できなければ母娘の絆は形成されず, 娘は安心感, 本来感を得ることができず「いい子」を振る舞う。この2つの仮説を基に, 娘の「いい子」の関連モデルを検討した。共分散構造分析の結果, 「母親の情緒的関わり」は「心理的サポート」のみ関連があることが示され,

「娘の心理的サポート認知」→「安心感」→「母娘の絆」→「本来感」→「いい子」というモデルとなった。

娘は, 母親の情緒的関わりの心理的サポート, 特に, 承認という母親から認められる経験ができたことによって安心感を獲得でき, その安心感を基に母娘の絆を形成していくことができる。また, その安心感を獲得できていれば本来感も得ることができ, 娘は自分らしくいられることができるので「いい子」を振る舞う必要がない。また, モデルの5つの変数はそれぞれ相関関係にあるため, 娘が母親の情緒的関わりによって母親から認められるという経験ができていなければ, 娘は安心感を得ることができず, 母娘の絆を形成できない。よって本来感も得られず「いい子」として振る舞うと考えられる。以上のことから, モデルの順序や関連は少し異なるが, 2つの仮説は支持された。

本研究では, はじめに, 「母親の情緒的関わり」→「母娘の絆」, 「母娘の絆」→「安心感」, 「安心感」→「本来感」という関連も想定していたが, モデルの検討の結果, それらの関連は採用されなかった。一方, 「母娘の絆」→「本来感」という新たな関連が示唆された。これは, 「母親の情緒的関わり」→「安心感」→「母娘の絆」→「本来感」という流れの方が妥当であるということである。つまり, 「安心感」というのは「母親の情緒的関わり」によって生じるものであり, その「安心感」があるからこそ「母娘の絆」が形成されるという愛着形成の過程と同様のモデルであると考えられる。「母娘の絆」→「本来感」についても, 子どもが母親と愛着を形成しながら基本的信頼感を獲得していくように, 「母娘の絆」を形成できたからこそ母親のことを心から信頼することができるようになり, 母親の前で「ありのままの自分」としていられるということを表していると考えられる。

母娘関係と「いい子」との関連

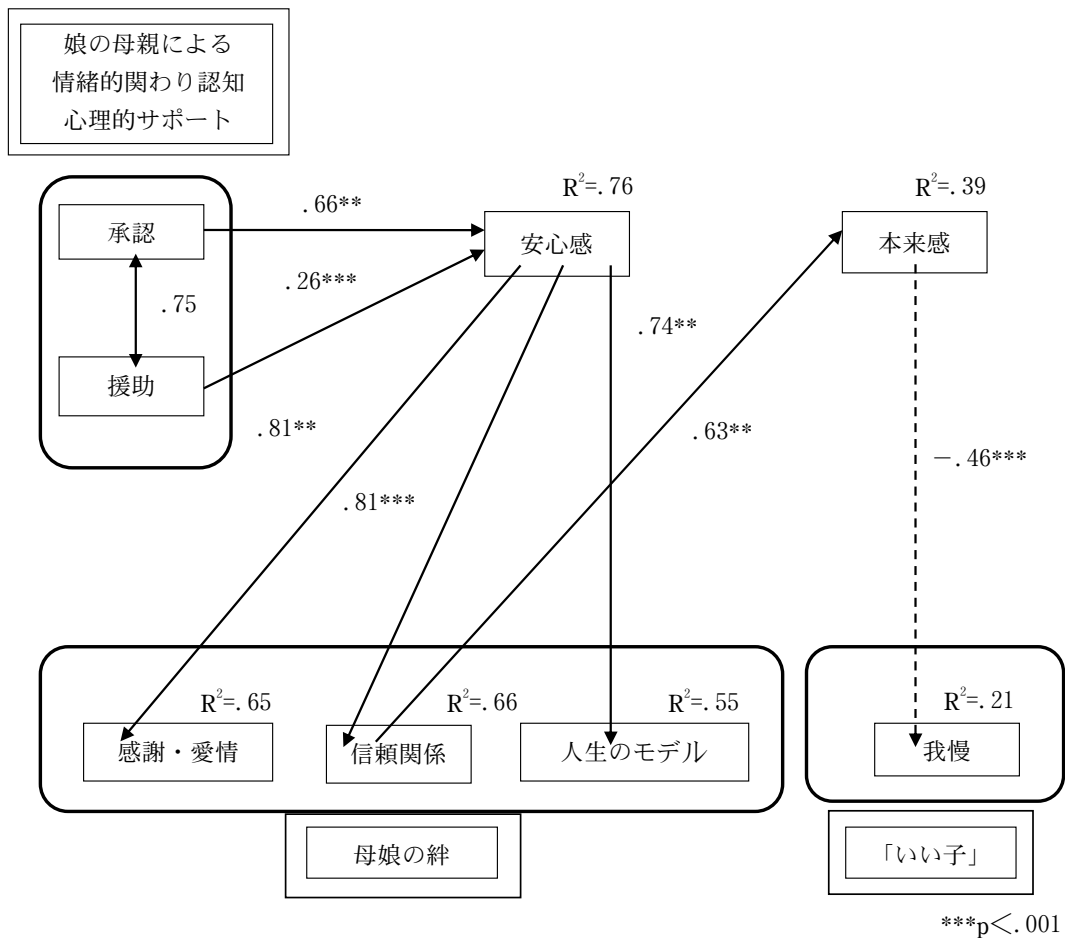


Fig. 3 因子ごとの最終モデル

今回の結果から、娘が「いい子」を振る舞うかどうかは、「母親から認められるという経験ができ、安心感を獲得できたかどうか」が非常に重要となると言える。母親の情緒的関わりによって娘は安心感を得ることができ、「母親は自分の要求や欲求を満たしてくれる存在である」と認識することができるようになり、母娘は愛着を形成していく。乳幼児期から形成してきた愛着は、母親に対する安心感はそのままに、その後の娘の成長によって、感謝や愛情、信頼といった、より強固な母娘の絆となっていくのではないだろうか。その過程をたどることができることによって、娘は本来感を獲得し、母親の前で自分らしく振る舞うことができるようになると思われる。

2. 各尺度間の関連について

1) 「母親の情緒的関わり」と「安心感」の関連

娘の「母親の心理的サポート認知」が娘の「安心感」に正の影響をもたらすことが示された。このことから、

娘が「母親は自分のために心理的サポートをしてくれた」と感じられることが娘の「安心感」につながると考えられる。因子ごとの最終モデルの結果から、「心理的サポート」の「承認」「援助」の2因子ともに「安心感」に正の影響をもたらし、特に「承認」から影響が強いことが示された。このことから、娘は母親からの「承認」が得られることによって、より「安心感」を得ることができると考えられる。

「承認」の項目は、「お母さんは私の考えに賛成してくれた」「お母さんは私の言うことやすることを認めてくれた」「お母さんは私をほめてくれた」などであり、「母親から認められる」という経験が特に娘の「安心感」には重要であると言える。

また、「援助」の項目は、「お母さんは私の悩みを聞いてくれた」「お母さんは私が困った時やつらい時に一緒に悩んだり考えたりしてくれた」などであり、母親が娘の困難に寄り添うことも娘の「安心感」につながると考えられる。

2) 「安心感」と「母娘の絆」の関連

娘の「安心感」が「母娘の絆」に正の影響をもたらすことが示された。このことから、娘は母親の「心理的サポート」によって得た「安心感」を基に「母娘の絆」を形成していると考えられる。因子ごとの最終モデルの結果から、「安心感」は「母娘の絆」の「感謝・愛情」「信頼関係」「人生のモデル」の3因子すべてに対して正の影響をもたらすことが示された。

「感謝・愛情」の項目は、「お母さんを大事に思っている」「お母さんに対して感謝の気持ちを持っている」「お母さんに対してこれからは親孝行したい」などである。娘は母親の「心理的サポート」から得た「安心感」によって母親への「感謝や愛情の気持ち」をもつようになると考えられる。

「信頼関係」の項目は、「お母さんは私のことを誇りに思ってくれている」「私とお母さんはお互いに信頼し合っていると思う」などである。娘は母親の「心理的サポート」によって得た「安心感」から母親のことを信頼できるようになり、それによって母親との「信頼関係」を築いていくと考えられる。

「人生のモデル」の項目は、「お母さんによって自分の視野が広がった」「何かを決める際、お母さんの意見は十分参考になる」などである。娘は母親の「心理的サポート」によって得た「安心感」によって、母親を自らの「モデル」として捉え、母親の姿や言動、考え方などを取り入れることができると考えられる。

3) 「母娘の絆」と「本来感」の関連

娘の「母娘の絆」が「本来感」に正の影響をもたらすことが示された。このことから、娘は「母娘の絆」が築かれることによって「自分らしく」振る舞うことができると考えられる。因子ごとの最終モデルの結果から、「母娘の絆」の3因子のうち、「信頼関係」のみが「本来感」に正の影響をもたらすことが示され、「本来感」の獲得には母親との「信頼関係」が重要であると言える。

「信頼関係」の項目は、「お母さんは私のことを誇りに思ってくれている」「私とお母さんはお互いに信頼し合っていると思う」などである。娘が母親と信頼関係を築き、心から信頼できる存在であることが、娘が母親の前でも「自分らしく」振る舞うことにつながると考えられる。

4) 「本来感」と「いい子」の関連

娘の「本来感」が「いい子」に負の影響をもたらす

ことが示された。このことから、娘は「本来感」を得ることができれば「いい子」を振る舞う必要がなくなると考えられる。因子ごとの最終モデルの結果から、娘の「本来感」は「いい子」の2因子のうち「我慢」に負の影響をもたらすことが示された。

「我慢」の項目は、「私はお母さんに自己主張できなかった」「私はお母さんの前では自分を素直に出せなかった」「私はお母さんの顔をうかがっていた」などであり、母親の前で「自分らしく」振る舞うことができず「我慢」していると考えられる。そのため、「自分らしさ」である「本来感」が得られていることで「いい子」として「我慢」する必要がなく、「いい子」を振る舞うことは少なくなると考えられる。

まとめと今後の展望

本研究では、①「母親の情緒的関わり」のうち「心理的サポート」の「承認」が娘の「安心感」の獲得につながる。②「心理的サポート」によって獲得した「安心感」を基に「母娘の絆」が形成される。③「母娘の絆」の「信頼関係」によって娘は「本来感」を得ることができ、「自分らしく」振る舞うことができる。④「本来感」を獲得し、「自分らしく」振る舞うことによって、「いい子」として「我慢」する必要がなくなり、「いい子」を振る舞うことは少なくなる。この4つの過程が、娘が「いい子」を振る舞うことに関連しているということが考察された。

このモデルは、仮説で述べてきたような、母子が愛着を形成していく一連の過程と同様の過程であると考えられる。このことから、娘が「いい子」を振る舞うことには、幼少期からの母親との愛着形成の過程が重要な意味をもつと考えられる。娘が母親との健全な愛着を形成していく中で、母親から「認められる」という経験が「安心感」の獲得につながり、その「安心感」を基に「母娘の絆」を築いていくと言える。そして、「お母さんは自分の欲求を満たしてくれる、信頼できる存在なのだ」と母親に対する信頼感を得られることによって、「本当の自分」を表出することが可能となる。この一連の過程が経験できれば、娘は「我慢」して「いい子」を振る舞うことなく「自分らしく」いることができると考えられる。また、「母親の情緒的関わり」「母娘の絆」「安心感」「本来感」「いい子」はそれぞれ相関関係にあり、逆のモデルも考えられる。娘が母親から「認められる」という経験ができず、「安心感」を獲得できていなければ、「母娘の絆」を形成し、母親との「信頼関係」を獲得することができない。そのため、母親

の前で「本当の自分」を表出することができないため、自らの本当の欲求を「我慢」して「いい子」を振る舞うと考えられる。

以上のことから、娘が母親との関係の中で「いい子」として振る舞うかどうかは、幼少期から「母親の情緒的関わり」を経験しながら継続して形成してきた「愛着や絆」が基礎となっており、その過程で「安心感」や「本来感」を獲得できるかどうか重要な意味をもっていると言える。

本研究では、母娘関係は特殊なものであるということから母娘関係についてのみ取り上げた。母息子関係についても取り上げ、「いい子」のモデルが娘と同様になるのか、母息子間のずれはどの程度生じるのかなどを検討し、娘と息子を比較していくという研究も必要であると考えられる。

文 献

- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss. Vol. 1: Attachment. New York: Basic. (北村琴美 2008 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性 ―愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連― 心理学研究 2008年 第79巻 第2号 pp.116-124)
- Bowlby, J. 1973 Attachment and loss. Vo2.: Separation. New York: Basic. (北村琴美 2008 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性 ―愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連― 心理学研究 2008年 第79巻 第2号 pp.116-124)
- 淵上規后子 1999 「よい子」の行動と心理の特徴 親の期待に応えようとしすぎる子 児童心理 12月号 No.724 第53巻 第17号 特集「よい子」が問題 金子書房 18-24
- 秦彩子 2000 「心の居場所」と不登校の関連について 臨床教育心理学研究 26, 97-106
- 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究 53, 74-85
- 岩宮恵子 2009 フツ子の子の思春期 ―心理療法の現場から 岩波書店(岡本祐子・深瀬裕子 編著 シリーズ生涯発達心理学① エピソードでつかむ 生涯発達心理学 ミネルヴァ書房 p.109)
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値: 今, なぜ子を産むか 教育心理学研究 47, 170-179.
- 北村琴美 2008 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性 ―愛着感情と抑うつ傾向, 自尊

- 感情との関連― 心理学研究 2008年 第79巻 第2号 pp.116-124
- 小林美緒・加藤和生 2009 「情緒的・道具的甘え尺度」の構成の試み 九州大学心理学研究 Vol.10, 81-92
- 増沢高 2012 子どもの不安のアセスメント 生活の中で子どもの抱えた不安や恐怖に気づくために 児童心理 5月号 第66巻 第7号 特集 安心感の乏しい子 金子書房 82-86
- 三池輝久 1999 「よい子」のストレスと疲れ 児童心理 12月号 No.724 第53巻 第17号 特集「よい子」が問題 金子書房 38-43
- 三砂ちづる・竹原健二・嶋根卓也・野村真利香 2006 母娘関係尺度作成の試み 民族衛生 72(4):153-159
- 宮下敏恵・石川もよ子 2005 小学校・中学校における心の居場所に関する研究 上越教育大学研究紀要 24, 783-801
- 水本深喜 2009 青年期から成人期への移行期の親子関係 ―特に母娘関係に焦点を当てた研究の展望 青山心理学研究 第9号 71-82
- 新美明夫・永田忠夫・松尾貴司 2006 初期成人期の母娘関係に関する研究(Ⅱ) ―母娘システムの共分散構造分析― 愛知淑徳大学論集―コミュニケーション学部篇 第6号 71-82.
- 則定百合子 2008 青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文
- 岡田尊司 2012 母という病 ポプラ社
- 岡村季光 2004 青年期における“居場所”の意味 第35回自己意識研究会発表資料(則定百合子 2008 青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文)
- 大河原美以 2006 ちゃんと泣ける子に育てよう ―親には子どもの感情を育てる義務がある 河出書房新社(大河原美以 2012 子どもの安心感の乏しさを生み出す背景 親の期待と子どものストレス ―「勝ち組」価値観のあやうさ 児童心理 5月号 第66巻 第7号 特集 安心感の乏しい子 金子書房 39-43)
- 大河原美以 2012 子どもの安心感の乏しさを生み出す背景 親の期待と子どものストレス ―「勝ち組」価値観のあやうさ 児童心理 5月号 第66巻 第7号 特集 安心感の乏しい子 金子書房 39-43

- 白井利明 1998 学生は居場所をどうとらえているか
—自己受容とセルフ・エスティームとの関連— 日
本青年心理学会第6回大会発表論文集 34-35.
- 田島彩子 2000 青年期のこころの居場所：居場所感
覚と抑うつ感 日本心理臨床学会第19回大会発表論
文集 Pp.258.
- 田中麻貴・田嶋誠一 2004 中学校における居場所感

に関する研究 九州大学心理学研究 5, 219-222.

付 記

本論文は、2014年度に提出した修士論文の一部を加
筆修正したものである。

本調査に協力いただいた皆様に深謝いたします。